

K270.8

1

1.2a

文部省著作教科書

高等國語 一下

文部省



高等國語

一下

文部省



目 録

一 案 内 者	一
二 ガラス障子	二
三 うつりゆく心	六
四 ロダンの遺言	三
五 言語の本質	元
六 光榮の作曲家	六
七 う さ ぎ	兎
八 春が来た	雪
付 録 國語學習の手引	三

一案内者

寺田寅彦

どこかへ旅行がしてみたくなる。しかし別にどこという決まったあてがない。そういう時に旅行案内記の類をあけて見ると、あるいは海浜、あるいは山間の湖水、あるいは温泉といったように、行くべき所がさまざまありすぎるほどある。そこでまずかりに温泉なら温泉と決めて、温泉の部を少しくわしく見て行くと、各温泉の水質や効能、周囲の形勝・名所・旧跡などのだいたいがざっとわかる。しかしもう少しくわしく具体的なのが知りたくなって、今度は温泉専門の案内書を捜し出して読んでみる。そうするとまずぼんやりとおよその見当がついてくるが、いくら詳細な案内記をていねいに読んでみたところで、結局ほんとうのところは自分で行って見なければわかるはずはない。もしもそれがわかるようならば、うちで書物だけ読んでいればわざわざ出かける必要はないと言ってもいい。次には念のためにいろいろの人の話を聞いてみても、人によってかなり言うことが違っていて、だれのオーソリティを信じていいかわからなくなってしまう。それでさんざんに調べた最後には、つまりいい加減に、賽でも投げると同じような偶然な機縁によって目的の地をどうにか決めるほかはない。こういうやり方はいわばアカデミックなオーソドックスなやり方であるといわれる。これは多くの人々にとって最も安全な方法であって、こうすればめったに大きな失望やとんでもない違算を生ずる心配が少ない。そうして主要な名所・旧跡をうっかり見落す氣づかいもない。

しかしこれと違ったやり方ではない。例えば旅行がしたくなると同時に、最初から賽を振っ

て行く所を決めてしまふ。あるいは偶然に読んだ詩篇か小説の中で、ある感興に打たれたような場所に決めてしまふ。そうして案内記などにはてんでかまわないで飛び出して行く。そうして自分の足と目で、自由に氣の向くまゝに歩きまわり見てまわる。この方法はとかくいろ／＼な失策や困難を惹起しやすい。またいわゆる名所・旧跡などのすぐ前を通りながら、知らずに見のがしてしまつたりするのはありがちなことである。これは危険の多いヘテロドックスのやり方である。これはうっかり一般の人に奨めることのできかねるやり方である。

しかし前の安全な方法にも短所はある。読んだ案内書や聞いた人の話が、いつまでも頭の中に巣をくつていて、それが自分の目を隠し耳をまう。それがためにせつ／＼出かけて来た自分自身は、いわば行李の中にでも押しこめられたような形になり、結局案内記や話した人が湯にはいつたり、見物したり、享樂したりすると同じようなことになる、こういうふうになりたがる恐れがある。もちろんこれは案内書や教えた人の罪ではない。

しかしそれでも結構であるという人がずいぶんある。そういう人はもちろんそれでよい。

しかしそれでは、わざ／＼出て来たかいたくないと考える人もある。曲がりなりにも自分の目で見て自分の足で踏んで、その見る景色、踏む大地と自分とが直接にびつたり触れ合う時にのみ感じられる鋭い感覚を味わわなければなんにもならないという人がある。こういう人はとかく案内書や人の話を無視し、あるいはわざと避けたがる。便利と安全を買うために自分を賣ることを恐れるからである。こういう変わり者はどうかすると万人の見るものを見落しがちである代わりに、いかなる案内記にも書いてない、いふものを掘り出す機会がある。

私が昔二、三人連れでイギリスの某離宮を見物に行った時に、その中のあるひとり、始終片手に開いたペデカを離さず、一室一室これと引き合わせては詳細に見物していた。そのペデカはちゃんと一度下調べをして所々赤鉛筆でいいねいにアンダーラインがしてあった。ある室へ来た時にそのある窓の前にみんなを呼び集め、ペデカの中の一行をさしながら「この窓から見ると景色がいいと書いてある。」と言って聞かせた。一同はそうかと思つて、この見のがしてならない景色を十分に觀賞することができた。

私はこの人の学者らしい徹底した、アカデミックなしかたに感心すると同時に、なんだかそこに名状のできない物足りなさ、あるいは一種のはかなさともいったような心持がするのを禁ずることができなかった。なんだかこれでは自分がペデカの編者それ自身になつてその校正でもしているような氣がし、そしてその窓が不思議なこだわりの網を私の頭の上に投げかけるように思われてきた。室に附随した歴史や故実などはペデカによらなければ全くわからないが、窓のながめのよしあしぐらゐは自分の目で見つけ出し選択する自由を許してもらいたいような氣もした。

ペデカというものがなかった時の不自由は想像の域かであるが、しかしまれには最新刊のペデカにだまされることもまるでないではない。ある都の大学を尋ねて行つたらそこが何かの役所になつていたり、名高い料理屋を捜し当ると貸家札が張つてあつたりしたこともある。ずさんな案内記でもあればそういう失敗はなさることである。しかし、こういう意味で完全な案内記を求めるのは元來無理なことではなければならない。そういうものがあると思うのが困難のものであろう。

それで結局案内記がなくとも困るが、あつて困る場合もないとは限らない。

中学時代にはじめての京都見物に行ったことがある。黒谷とか金閣寺とかいう所へ行くと、案内の小僧さんが建築の各部分や什物の品々の來歴などを一々説明してくれる。その一種特別な節をつけた口調もいなか者の私には珍しかったが、それよりも、その説明がいかに機械的で、言っている事がらに對する情緒の反應が全くなくて、説明者が單に決まっただけの声を出す器械かなんぞのように見えるのがよほど珍しく不思議に感ぜられた。その時に見た宝物やふすまの絵などはもうたいがいきれいに忘れてしまっているが、その時の案内者の一種の口調と空虚な表情とだけは今でも頭の底にありありと残っている。

その時に一つ困ったことは、私が例えばある器物が絵かに特別の興味を感じて、それをもう少し詳しくわしくゆっくり見たいと思つても、案内者はすべての品物に平等な時間を割り当てて進行して行くのだから、うっかりしているとその間にずん／＼先へ行ってしまつて、その間に私はたゞさんの見るべき物を見のがしてしまわなければならないことになる。それはかまわないつもりでいてもそこを見て後に、同行者の間でちょうど自分の見落したいいものについての話題が持ちあがつた時に、なんだか少し惜しいことをしたという氣の起るのは免れがたかった。

学校教育やいわゆる参考書によつて授けられる知識は、いろ／＼の点で旅行案内記や、名所の案内者から得る知識に似たところがある。

もし学校のようなありがたい施設がなくて、そしてたゞ全くの独学で現代文化の藏している廣大な

知識の林に分け入り、何物かを求めようとするのであつたら、その困難はどんなものであろうか。始めから終りまで道に迷い通しに迷つて、無用な労力を浪費するばかりで、結局目的地の見当もつかずに日が暮れてしまうのがおちであると思われる。

しかし学校教育の必要といつたようなことを今さら新しくこゝで考へ論じてみようというのではない。たゞ学校教育を受けるといことが、ちやうど案内者に手を引かれて歩くとよく似ているといふことをもう少し立ち入つて考へてみたいだけである。

案内記が詳密で正確であればあるほど、これに對する信頼の念が厚ければ厚いほど、われ／＼は安心して、岐路に迷ふことなしに最小限の時間と労力を費やして安全に目的地に到着することができ。これに増すありがたいことはない。しかしそれと同時にその案内記にしろしない横道に隠れた貴重なものを見のがしてしまう機会ははなはだ多いに相違ない。そういう損失をなるべく少なくするには、やはりいろ／＼の人の選んだいろ／＼の案内記を廣く参照するといふ。たゞ困るのは、すでにある案内記の内容をそのまゝにいい加減に継ぎ合わせてこしらえたような案内記の多いことである。これに反して、むしろまちがいだらけの案内記でも、それが多少でも著者の體驗を材料にしたものである場合には、存外何かの参考になることが多い。

しかしいくら完全でも結局案内記である。いくら読んでも暗誦しても、それだけでは旅行した代わりにはならないことはもちろんである。

案内記が系統的に完備しているといふことと、それが読む人の感興を引くといふことは全然別なことで、むしろ往々あい容れないような傾向がある。いわゆる案内記の無味乾燥ものに反して、すぐ

れた文学者の自由な紀行文やあるいは鋭い科学者のまともでない観察記は、それがいかに狭い範囲の題材に限られていても、その中に躍動している活きた体験から流露するあるものは、直接に読者の胸にしみこむ、そしてたといそれがまちがっている場合でさえも、書いた人の眞を求める魂だけは力強く読者に訴え、読者自身の胸裏にある同じようなものに火をつける。そうしてしるされた内容とは無関係にそこに取り扱われている土地そのものに對する興味と愛着を呼び起す。

専門の學術の参考書でもよく似たことがある。何かある題目に關して廣く文獻を調べようという場合には、いろ／＼なエントクロペディやハンドブックという種類のものは、なくてはならないような場合なのであるが、少し立ち入ってほんとうのことが知りたくなればもうそんなものは役に立たない。つまりは個々のオリジナルの論文や著書を見なければならぬ。それでこのような参照用の大部なものをほねおって始めから終りまで漫然と読み通し暗誦したところで、すでになんらかの「題目」を持つていない学生にとってはきわめて効果の薄いほねおりになりやすいものである。またこんなものから題目を選び出すということも、できそうでできないものである。これに反して個々の研究者の直接の体験を記述した論文や著書には、たといその題材がなんであつても、その中に何かしら生きて動いているものがあつて、そこから受ける暗示は読む人の自発的な活動を誘発するある不思議な魔力を持つてゐる。そうして読者自身の研究心を強く呼び覚ます。こういう意味からでも、自分の専門以外の題目に關するいい論文などを読むのは決して無益なことではない。

それで案内記ばかりに頼つてはいつまでも自分の目はあかないが、そうかといつてまるで案内記を無視していると、時々道に迷つたり、事によると流つぽや火口に落ちる恐れがある。これはわがりきつたことであるが、それにかゝわらず教科書とノートばかりを頼りにする学生がかなり多数である一方には、また現代既成の科学を無視したために、せつ／＼い考えは持ちながら結局失敗する発明家や発見者も時々出て来る。

名所・旧跡の案内者の一番困るのは何か少し余計なものを見ようとする、No time, Sir—などと引つ立てることである。しかしこれも時間の制限があつてみれば無理もないことである。それでほんとうに自分で見物するには、もう一遍ひとりで出なさいなければならぬことになる。たゞその時に例の案内者が「じゃま」をしてくれさえしなければいい。

しかし案内者や先達の中には、自己のオーソリテイに對する信念から割り出された親切から個々の旅行者の自由な観察を抑制する者もないとはいわれない。旅行者が特別な興味を持つ対象の前にしばらく歩をとめようとするのを、そんなものはつまらないから見るのじゃないと世話をやく場合もある。つまるとつまらないとが明らかに「相対的」のものである場合にはこれは困る。案内者が善意であるだけにいつそう困るわけである。この種の案内者はその専門の領域が狭ければ狭いほど多いように見えるが、これは無理もないことである。自分の「お山」以外のものはみなつまらなく見えるからである。

一方で案内者の方からいうと、その率いている被案内者からあまりに信頼されすぎて困る場合もずいぶんありうる。どこまでも忠実に附従して来るはいいとしても、まさか手洗所までのそ／＼いつて來られては迷惑を感じるに相違ない。

ニュートンの光学が波動説の普及を妨げたとか、ラプラスの権威が熱の機械論の発達にじゃまになったとかいうことはよく耳にすることである。ある意味では確かにそうかもしれない。しかしこの全責任を負わされてはこれらの大家たちはおそろく泉下に眠ることができない。少なくとも責任の半分以上はこれらのオースリテイに盲従した後進の学徒に帰せなければならぬ。近ごろ相対性原理の発見に際してまたニュートンが引き合いに出され、かれの絶対論がしばしばまいたの上に載せられている。これは当然のこととしても、それがためにニュートンを罪人呼ばわりするのはあまりに不公平である。罪人はもともとほかにかくさんある。いわばニュートンは真理の殿堂の第一のとびらを開いただけで遊んでしまった。かれの被案内者は第一室の壯麗に酔わされてその奥に第二室のあることを考える者はまれであった。つい近ごろにアインシュタインが突然第二のとびらをけ開いて、そこに玲瓏たる幾何学的宇宙の宮殿を発見した。しかし第一のとびらを通過しないで第二のとびらに達しえられたかどうかは疑問である。

この次の第三のとびらはどこにあるだろう。これはわれ／＼には全然予想もつかない。しかしその未知のとびらにぶつかってこれを開く人があるとすれば、その人はやはり案内者などのやっかいにならない風來のいなか者でなければならぬ。第三のとびらのことはいかに権威ある案内記にもしてないものである。

思うにうっかり案内者などになるのは考えものである。黒谷や金閣寺の案内の小僧でも、はじめてあの建築や古器物に接した時にはおそろくさ／＼な深い感興に動かされたに相違ない。それが毎日

同じことをくり返している間にあらゆる興味は蒸発してしまつて、すっかり口上を暗記するころには、品物自身はもう頭の中から消えてなくなる。残るものはたゞ「ことば」だけになる。目はそのことばにおゝわれて「物」を見なくなる。そうして丹波の山奥から出て来た観覧者の目に映るような美しい影像はもう再び認める時はなくなってしまう。これは実にその人にとっては取り返しのつかない損失でなければならぬ。

このような人は單に自分の担任の建築や美術品のみならず、他の同種のものに対しても無感覚になる恐れがある。例えばよその寺で狩野永徳の筆を見せられた時に「狩野永徳の筆」という声が直ちにこの人の目をおゝい隠して、眼前の絵の代わりに自分の頭の中に沈着してかびの生えた自分の寺の絵の像のみが照らし出される。たゞいその頭の中の絵がいかにりっぱでもこれでは困る。手を触れるものがみんな黄金になるのでは餓死するほかはない。

職業的案内者がこのような不幸な境界に陥らぬためには絶えざる努力が必要である。自分の日々説明している物を絶えず新しい目で見なして、二日に一度、あるいは一月に一度でも何かしら今まで見出さなかつた新しいものを見出だすことが必要である。それにはもちろん異常な努力が必要であるが、そういう努力は苦しい。それをしなくても今日には困らない。そこに案内者のはまりやすい「洞窟」がある。

われ／＼は子供などに科学上の知識を教えている時に、しばしば自分がなんの氣もつかずに言っている常套の事がらの奥の深みに隠れたあるものを指摘されて、職業科学者の弱点をきわどく射通される思ひがすることはな／＼である。

グラムが発電機を作った時に当時の大家某は一論文を書いて、そのようなことが不可能だという証明をした。それにかゝらずグラムの器械からは電流が遠慮なく流出した。その後この器械から電流の生ずるといふ方の証明がだん／＼現われて来たといふ話を何かで読んだことがある。しかしその大家の論文をよく読んでみなければうっかりその人の非難はできない。

ヘルムホルツが「人間が鳥と同じようにして空をかけることはできない。」と言ったのに、現に飛行機ができたではないかという人があらばそれは見当違いの弁難である。現在でも將來でも鳥のように翼を自分の力で動かして、たゞそれだけで鳥のようにかけることはできない。

すべての案内者も時々これに類した誤解から起る非難を受ける恐れのあることを覚悟しなければならぬ。例えば、案内者が「この河を渡る橋がない。」という意味で渡れないと言ったのを船で渡って歩いて「この通り渡れるではないか。」と言われるのはどうもしかたがない。これらはあそらくどちらも悪いが、どちらも悪くないかである。意志が疎通しないから起る誤解である。

しかしあらゆる誤解を予想してこれに備えることはきわめてむずかしい。こゝにも案内者と被案内者の困難がある。

考えてみると案内者になるのも被案内者になるのもなか／＼容易ではない。すべての困難は「案内者は結局案内者である。」という自明的な道理を忘れやすいから起るのではあるまいか。

景色や科学的知識の案内ではこのような困難がある。もっと違つたいろ／＼の精神的方面ではどんなものであろうか。この方には更にはなほだしい困難があるかもしれないが、あるいは事によるとかえつて事がらが簡単になるかもしれない。そこには「信仰」や「愛情」のようなものはいりこんで来るからである。しかしそうなるともう私がこゝに言っているたゞの「案内者」ではなくなつて、それは「師」となり「友」となる。師や友に導かれて誤つて廣野の道に迷つてもうらみはないはずではあるまいか。

（寺田寅彦隨筆集）

二 ガラス障子

正岡子規

わが病室の障子にガラスを張りてガラス障子の歌よみける中に十三首（九首略）

いたつきのねやのガラス戸影透きて小松の枝にすゞめ飛ぶ見ゆ
病みこやるねやのガラスの窓の内に冬の日さしてさち草咲きぬ
物干に來るをからすはガラス戸の内に文書くあれ見て鳴くか
ガラス張りて雪待ちをればあるあした雪ふりしきて木につもる見ゆ

庭前即景 十首

やまぶきは南かきねになの花は東ざかひに咲きむかひけり
かな網の大鳥籠に木を植ゑてほつゑしづえにひわ飛びわたる
くれなゐの二尺伸びたるばらの芽の針やはらかにほるさめの降る

二 ガラス障子

汽車の音の走りすぎたるかきの外のもゆるこぬれに煙うづまく
すぎがきをあさり青な花をふみまつへ飛びたるしじふから二羽
一うねの青な花の咲き満つる小庭の空にとび舞ふ春日
くれなゐの若葉ひろがるはち植ゑのぼたんのつぼみいまだなかりけり
はるさめをふくめる空の薄曇りやまぶきの花の枝もうごかず
家主の植ゑて置きたるわが庭のせひく若松わかみどりたつ
もゝ草のもえいづる庭のかたはらのまつの木陰になの花咲きぬ

星 二首

まさごなす数なき星のその中にわれに向かひて光る星あり
たらちねの母がなりたる母星の子を思ふ光われを照らせり

ゆふげしたゝめをはりて、あふ向けに寝ながら左のかたを見れば、机の上にふちを沿けたる、いとよく水
をあけて、花は今を盛りのありさまなり。艶にもうつくしきかなとひとりごちつゝ、そとろに物語の昔な
どしぬばるるにつけて、あやしくも歌心なん催されける。この道には日ごろうとくなりまざりたれば、お
ぼつかなくも筆を取りて、 十首(四首略)

かめにさすふちの花ぶさ短ければたゝみの上にとゝかざりけり
かめにさすふちの花ぶさ一ふさはかさねし書の上に垂れたり

ふぢなみの花をし見れば奈良のみかど京のみかどの昔こひしも
ふぢなみの花をし見れば紫の絵の具取り出で写さんと思ふ
ふぢなみの花のむらさき絵にかかばこき紫にかくべかりけり
かめにさすふちの花ぶさ花垂れて病の床に春暮れんとす

おだやかならぬふしもありがちながら、病のひまの筆のすさみは、日ごろまれなる心やりなりけり。をか
しき春の一夜や。

やまぶき 十首(七首略)

裏口の木戸のかたへの竹がきにたばねられたるやまぶきの花
水くみにゆききのそでのうち触れて散りはじめたるやまぶきの花
歌の会開かんと思ふ日も過ぎて散りがたになるやまぶきの花

紅 梅 六首(四首略)

くれなゐのうめ散るなべにふるさとにつくし摘みにし春しちもほゆ
まくらべに友なき時ははち植ゑのうめに向かひてひとり伏しをり

つくし 九首(六首略)

赤羽の堤におふるつくし(赤羽)のびにけらしも摘む人なしに

赤羽の汽車行く路のつく／＼しまた來む年も往きて摘まなむ
つく／＼しふるさとの野に摘みしことを思ひ出でけり異國にして

春立つや晝の灯くらき山やしる

あたゝかに白壁ならぶ入江かな

行く春やほう／＼としてよもぎ原

一桶のあゐ流しけり春の川

夜越えしてふもとに近きかはづかな

若あゆの二手になりてのほりけり

樹陰涼しこゝに晚餐の草ならぶ

しほ引いてどろに日の照る曇さかな

夏羽織われを離れて飛ばんとす

さみだれや上野の山も見あきたり

うるこちるさこばのあとや夏の月

蕉翁奥の細道の跡をたどりて

その人の足跡ふめば風かをる

もの花や水ゆるやかに手長えび

河骨の水を出かぬるつばみかな

あかつきのひや／＼かな雲流れけり

荒波や二日の月をまいて去る

いなびかりすゝきの上を走りけり

いね刈りてにぶくなりたるいなごかな

三日月のころより肥ゆる子芋かな

あさがほやまつこのずゑの花一つ

法隆寺の茶店に憩ひて

かき食へば鐘が鳴るなり法隆寺

けいとうの十四五本もありぬべし

草庵

まきをわるいもうとひとり冬ごもり

病中雪

いくたびも雪の深さをたづねけり

土ともにくづるがけの霜柱

さよしぐれ上野を虚子の來つゝあらん

すゝはきのほこりしづまる葉蘭かな

絶筆 三句

へちま咲いてたんのつまりし佛かな

二 ガラス障子

たん一斗へちまの水もまにあはず
をとひのへちまの水も取らざりき

九月十四日の朝

朝かやの中で目が覚めた。なお半ば夢中であつたが、おい／＼と云うて人を起した。次の間に寝て
いる妹と、座敷に寝ている虚子とは同時に返事をして起きて來た。虚子は看護のためにゆうべ泊つて
くれたのである。兩戸をあける。かやをはずす。この際余は口の内に一種の不愉快を感じるととも
に、のどがかわいて全くうるおいのないことを感じたから、用意のためまくらもとの盆に載せてあつ
た甲州ぶどう十粒ほど食つた。なんともいえぬうまさであつた。金莖の露一ばいという心持がした。
かくて、よう／＼眠りがはつきりと覺めたので、十分にならだの不安と苦痛とを感じて來た。今、人
を呼び起したのも、もちろんそれだけの用はあつたので、直ちにうちの者に不淨物を取りのけさし
た。余は四、五日前より容態が急に変わつて、今までもほとんど動かすことのできなかった兩脚が、に
わかに水を持つたようにふくれあがつて、一分も五厘も動かすことができなかったのである。そろ
りそろりと臍の下へ手をあてごうて動かしてみようとすると、大磐石のごとく落ちついた脚は、非
常の苦痛を感じねばならぬ。余はしば／＼種々の苦痛を経験したことがあるが、今度のような非常な
苦痛を感じるのははじめてである。それがためにこの二、三日は余の苦しみと、家内の騒ぎと、友人
の看護かた／＼訪い來るなどで病室には一種不穩の徴を示している。昨夜もおい／＼せいで來てあつた友人
(碧梧桐、鼠骨、左千夫、秀真、節)は帰つてしまつて、余らの眠りについたのは一時ごろであつたが、

けさ起きてみると足の動かぬことは前日と同じであるが、昨夜に限つてほとんど間断なく熟睡を得た
ためであるか、精神は非常に安穩であつた。顔は少し南向きになつたまゝ、ちつとも動かれぬ姿勢に
なつていたのであるが、そのまゝにガラス障子のそとを靜かにながめた。時は六時過ぎたくらいで
あるが、ぼんやりと曇つた空は、少しの風もないのはだ靜かな景色である。窓の前に一間半の高さ
にかけた竹のたなには霞簀が三枚ばかり載せてあつて、その東側から登りかけているへちまは十本ほ
どのやつが、みなやせてしまつて、まだたなの上まではえ取りつかずにいる。花も、二、三輪しか咲
いていない。正面にはおみなえしが一番高く咲いて、けいとうはそれよりも少し低く五、六本散ら
ばつてゐる。しゅうかいどうは、なお衰えずにそのこずえを見せている。余は病氣になつて以來、け
さほど安らかな頭をもつて靜かにこの庭をながめたことはない。うがいをする。虚子と話をする。南
向この家には、尋常二年生ぐらいな声で本の復習を始めたようである。やがて納豆賣りが來た。余
の家の南側は小路にはなつてゐるが、もと加賀の別邸内であるので、この小路も行きどまりである
ところから、豆腐賣りでさへこの裏路へ來ることはきわめて少ないのである。それで、たま／＼珍しい
飲食商人がはいつて來ると、余は奨励のためそれを買つてやりたくなる。けさは珍しく納豆賣りが來
たので、邸内の人はあちからもちちからも納豆を買つてゐる声が聞える。余もそれを食いたいとい
うのではないが少し買わせた。虚子とともに須磨にいた朝のことなどを話しながら外をながめてい
ると、たまに露でも落ちたかと思ふように、へちまの葉が一枚二枚だけひら／＼と動く。そのたび
に、秋の涼しさは膚に浸みこむように思つて、なんともいえぬよい心持であつた。なんだか苦痛きわ
まつてしばらく病氣を感じないようなのも不思議に思つたので、文章に書いてみたくなつて余は口

でつゝる。虚子に頼んでそれを記してもらつた。筆記しおえたところへ母が来て、ソツプは來てゐるのぞなと言つた。

(子規全集)

三 うつりゆく心

櫛口一葉

(明治二十六年) 十月九日 晴れ。この二日より晴雨とも、日々図書館にかよひて暮らしけるが、けふはえ行かで、奥なる一間にこもりて書を読む。店は、きのふおとゝひより賣れ高、いと多くなりて邦子のいそがしきこと、たちゐひまなし。さるは、近き所にもとよりありける家の、わが家に賣りまけて店を閉ぢけるが二軒あるよしに聞けば、それがためなるにや。さしもきそひ心などのあるにもあらず。おのづからにまかせてあきなふものから、店をあづかる邦子に運といふものあればなるべし。

(十一月) 二十三日 星野子より「文学界」の投稿うながし來たる。いまだまとまらずして、今朝日は夜すがら起きぬたり。

二十四日 終日つとめてなほならず。また夜とともにす。二日二夜がほどつゆねぶらざりけるに、まなこはいとゞさえて、氣はいよゝ澄み行くものから、筆とりて何事を書かんと思ふことは、たゞ雲の中をわくるやうにあやしう一つ所をのみ行きかへるよ。いかであすまでにつゞきをはらばや。こ

れならずんば死すともやめじとたゞ案じに案ず。かくて、二更のかねの声も聞えぬ。氣はいよゝ澄み行きぬ。さし入る月のかげは霜にけぶりて、朦々朧々たるけしき、まことに深夜の風情目にせまりて、まなこはいとゞさえ行きぬ。かくても文辞は筆にのぼらず、とかくして一番どりの声も聞えぬ。大路行く車の音聞えそめぬ。心はいよゝせはしくなりて、あれよりこれに移り、これよりあれに移り、筆はさらに動かんともせず。かくて明けゆく夜半もしるく、向かひなる家、となりなどにて、戸あくる音、水くむなど聞えそむるまゝに、たゞ雲のうちに引き入れらるごとくなりて、ねるともなくしばしふしたり。

二十五日 晴れ。霜いと深き朝にて、ふと見れば初雪降りたるやうなり。ねぶりけるはひとときばかりなりけん。けさはまた、金杉に菓子おろしに行く。寒さものに似ざりき。しばしにても、たましひをやすめたればにや、けふは筆のやすらかに取れて、午前うちに清書を終りぬ。郵書になして星野子におくりしは、一時ごろなりしか。

(二十七年三月) 日々にうつりゆく心の、あはれいつの時にか誠のさとりを得て、古潭の水の月を浮かべることならんとすらん。おろかなる心のならひ、時にしたがひ、ことに移りて、かなしきは一寸おになしく、をかしきは一寸おにをかしく、こしかたをわすれ、行く末をも思はで、身をふるまふらんこそうたてもありけれ。心はいたづらに雲居にまでのぼりて、思ふことはさきよくいさぎよく、人はおそるらん死といふことをも、たゞ風の前のちりとあきらめて、山ざくらちるをことわりと思へば、

あらしもさまでおそろしからず。たゞこの死といふことをかけて、浮世を月花におくらんとす。ひとへに思へば、そのいにしへのかしてき人々も、この願ひにほかならじ。さるものから、思ふまゝを行ひて、思ひのまゝに世を経んとするは、おぼよそ人の願ふところなめれど、さもありがたきことなれば、人々身を屈し、ことをはかりて、心は悟らんとしつゝ、身は迷ひのうちに終るらんよ。あはれはかなしやな。無中有を生じて、こゝに一道の明らかなるものあれば、人中に事をなさんとはだつるもの、かならず入道によらざるべからず。天地ことごとくのみ盡くして、有無兩端をたなぞここにざりたりとも、行はざる誠は、人みるによしなし。わが身きよしといへども、感は人の心にありて耳にあらねば、かひなきは放言高論のたぐひなり。世に文章家といふものありて、華文・麗辭をつらぬるによく、和歌・俳句たくみに詠するもあり。また弁士とて、悲歌慷慨の語をなして一時の感起すもあり。さるものから、これらいくつのも偶をまはして人目を喜ばしむるたぐひにも似て、たゞ一時の喜びばかりならんのみ。一時に起りたる感は、一時にして消えぬべし。一代をつゝみ、百世に残りぬべきわざをと思ふに、事はわが身にありて人にあらず。わが身きよしとて、人をあとするはだよし。人を論ずるを知りて、わが身の誠をあらはすを知らず。心は天地の誠を抱きて、身は一代の狂人になりも終らば、人に益なく、浮世に功なく、清濁いづれをまされりとせんや。されば、いにしへのかしこき人は、心の誠をもととして、人の世に処するの務をはげみたりき。つとめは行ひなり。行ひは徳なり。徳つもりて、はじめて人の感ある。この感、一代をつゝみ百世にわたり、風雨・霜雪やぶるによしなく、一言一世に功あり。一語人に益あり。こん／＼たる流れは、濁りを清きにかへして人生是非の標準さだまらんとす。わが一身の欲を捨て、楽しみを捨て、しかしてのちに、わが思

ふまゝの世を得んとす。花をも実をもはじめより得んとしては、いかでか得んと書きおきし人もあるをや。

(二十八年二月) 人づてなどに聞きつる時は、いといみじと思ひつる人の、あひ見るに、みおとりするこそ口惜しけれ。さては、世にいみじと傳へいふは、おぼかたかゝるにこそ。珍しげなし、あさまし、など思はんは、いかにぞや。それ、さるものなればこそ、世はいよ／＼あなどるまじかりけれ。よろしき名ある人の、かくいひがひなきがごとく、かくろへしのびてありとも、人知らぬほとりに思ひのほかなるかしくきもぞまじれる。不定の世なれば、目もたのまじ、耳もたのまじ。位やんごとなきをも、何かはおそれん。はにふの小屋なるをも、何かおとしめん。名は実にあらず。実は名にあらず。詮ずるに、あなどるまじきは世の中なり。

(十月) おそろしき世の波かぜに、これよりわが身のたゞよはんや。思ふもかなしきは、やうやうをさな子のさかひをはなれて、争ひしげき世に交はるなりけり。きのふはなにがしの雑誌にかく書かれぬ。けふはこの大家のしか／＼評せりなど、たゞ春の花の榮えある名ばかり得るごとく見ゆるものから、あさましきは、そのそこにひそめるところのさま／＼なりけり。若松・小金井・花岡の三女史が先んずるあれども、おくれ出てたるこの人をもて女流の一といふをはからず、たゞへてもたほた、へつべきはこの人の才筆などいふもあり。紫清さうてことし幾百年、とつて代はるべきはそれきみぞなどいふもあり。あるはとつ國の女文豪がをさなだちに比べ、今の世に名高き秀才のきはに

ならべぬ。何事ぞ、をとゝしのこのころは、大音寺前に一文菓子ならべて乞食を相手に朝夕を暮らしたる身なり。学はたれか傳へし、文をばまたいかにして学ぶべき。草端の一螢、よしや一時の光を放つとも、空しき名のみ、あだなる声のみ。われに比べて秀才のきはなみ／＼ならざりし、さかのやが末のはかなきこと、山田の美妙が数奇の体、あはれ、あはれ、安き世の好みに投じて、この争ひに立ちまじる身、いかばかりかはあさましからざらん。されども、いかゞはせん、舟は流れの上にのりぬ。かくれ岩にくだけざらんほどは、引きもどすことかたかるべきか。

きはみなき大海原に出でにけり

やらばや小舟波のまに／＼

(一 葉全集)

四 ロダンの遺言

オーギュスト・ロダン

「美」の祭司たらんと志す若き人たち、諸君はおそらくこゝに載せる長き経験の要約を喜んで見てくれるであらう。

敬虔なる心をもつて愛せよ、諸君に先行せるもの／＼の巨匠たちを。

頭をさげよ、フィディアスの前に、そうしてまたミケランジェロの前に。賛嘆せよ、前者のこうとうしき酔けさを、後者の激越なる苦悩を。賛嘆こそは、氣品ある人々の酔うにふさわしき良酒である。

先輩を模倣することは、しかし、避くべきである。諸君は傳統を尊敬するとともに、傳統が包んでゐるもののうち、永遠に生産的であるところのものを見定めることを知らなければならぬ。それは即ち「自然」の愛と誠実とであることを知らなければならぬ。これが実に天才たちの持っている二つの強烈なる情緒である。あらゆる天才は自然を熱愛した、そうしてまだかれらは決して偽ることをしなかつた。傳統は、そうであるからして、諸君をして傳習株守から脱出せしめるところのかぎを、諸君に手渡ししようとしているのである。實在に向かつて絶えず開くことを諸君に勧め、いかなる大家にも盲従することを、諸君に禁ずるところのものは即ち傳統それ自身である。

彫刻家たち諸君、諸君は「深みに対する感じ」をつとめて涵養しなければならぬ。一体われ／＼の精神は、この觀念に親しみを持つことが困難である。われ／＼の精神がめいりように表象しうるのはたゞ表面のみであつて、諸形態を厚みを有するものとして想像することは容易でない。しかるに諸君の課題はあたかもそこにある。

諸君が彫刻する時、まず第一に像の主要なる諸「面」を截然と確立せしめておくことが、何をあいても最も必要なことである。頭・両肩・骨盤・手足等、人体の各部に與える方向決定は、あくまでも強烈に高調されなければならぬ。藝術の要求するところは直截簡明にある。諸線に判然たる方向を與えることによつて、はじめて諸君は空間の中に突き入ることもでき、また深みを捕らへ出すこともでき

る。諸「面」が確立すれば、その時すべては解決されたのである。彫像はその時すでに生命を得たと見える。細部はそこからしておのずから生まれ、またおのずからにしてそのところを得る。

原型を造る際、決して表面を主にして考えてはならぬ。凸凹^{うぼこ}において考えなければならぬ。

あらゆる表面を單なる表面としてでなく、その背後からこれを圧しているところの積量の終極として考えることに慣れなければならぬ。形態は、みなわれ／＼に向かつてその尖端^{せん}を突きつけているものと思え。あらゆる生命は一個の中心からわき出る。そうして内から外へと向かつて芽を出し、花を咲かせるのである。それと同様に、よき彫刻においては、われ／＼は常にそこに内部からの強き力を感知する。いにしへの彫刻の祕密はそれである。

画家たち諸君、諸君もまた同様に、實在を「深み」において観取しなければならぬ。例えば、ラファエルのえがいた肖像画をとって見るといい。正面から見られた人物をえがく時、かれはその胸部をな／＼めに後方へ退かしめる。そうして第三次元の幻覚を生ぜしめている。

あらゆる巨匠は、みな測深錘をもって空間を究めた人たちである。かれらの力は「厚み」の觀念にある。

線なるものはない、あるところのものはたゞ積量のみである。——このことを記憶せよ。えがく時、諸君は輪郭に心を奪われてはならぬ、凸凹に注意を集中すべきである。輪郭を支配するものは凸凹なのである。

たゆまず腕を鍊らなければならぬ。技術に熟達しなければならぬ。

藝術は感情よりほかの何物でもない。しかし、積量・比例・色彩についての知識なく、手の鍊達なくしては最も強い感情も麻痺^{しび}せしめられる。最も偉大なる詩人といえども、かれがその國語を知らざる國においては何をなすことができよう。新時代の藝術家の中には、不幸にも言語を學ぶことを拒否する詩人たちが少なくない。それらの人たちの語るところもまた、したがって、かたことたるにすぎない。

忍耐が必要である。靈感を頼んではならぬ。靈感なるものは存在しない。藝術家の唯一の力は、知恵と注意と誠実と意志とにある。仕事をなすに当たって、諸君はよき労働者たちのごとくあらねばならぬ。

若き人たちよ、自然に忠実であれ。しかし、かく言うのは、平凡に精確なれとの意味ではない。低級なる精確さなるものがある。例えば、写真や取り型のそれ。藝術はたゞ内部的真とともにのみ始まる。諸君の造るあらゆる形態、諸君のえがくあらゆる色彩、それらは感情を傳えるものでなければならぬ。

目を欺くものをもって満足し、意義なき細部を奴隸的に再現することをつとむる者は、とうてい大家となることはできぬ。諸君にして、もしイタリアのどこかのカンホーサント(墓地)を見たことがあるなら、その墓石の裝飾に従事せる彫刻家たちが、いかほどの愚劣さをもって彫像の衣服・毛髪等の

細部を模写せんとつとめているかに氣づかれたことであろう。あの諸像はおそらく精確なのである。しかし眞實ではない。それはわれ／＼の魂に訴えるところのものを欠くからである。

深刻に一徹に眞實であれ。諸君が感ずるところのものを表現するのに——たといそれが世に認められてゐる思想に反対であらうとも——ちゅうちょしてはならぬ。すぐには、あるいは理解されぬかもしれない。しかし、諸君の孤立は、たゞ單に短き期間のみであるであらう。たちまちにして、味方が諸君にできるであらう。なぜならば、ひとりにとりて深刻に眞なるところのものは、すべての人々ととりてもそうでなければならぬからである。しかし、公衆をひくための奇矯なる顔つきや姿勢は排すべきである。どこまでも單純で、すなわでなければならぬ。

最も美なる題材は諸君の眼前にある。諸君が最もよく知つてゐるところのものが即ちそれである。私のきわめて親しかった、そうしてまたきわめて偉大であつた（あまりにも早くわれ／＼から去つた）ユージェーヌ・ロカリエールは、かれの妻子らえがいて天才を示したのであつた。かれには、母性愛を謳歌するだけのことが、かれを崇高ならしめるに十分だつたのである。巨匠とは、ひつきう、だれでも見てはいたものを、自分みずからの目で見える人である。他の人々を引きとめるには、あまりに平俗であるところのものの美しさを見うる人である。

だめな藝術家らは、いつでも他人のめがねを掛ける。

たいせつなことは感激することである、愛することである、望むことである、戦慄することであ

る、生きることである。藝術家たる前に、まず人間たれ。眞の雄弁は雄弁を氣にせぬとパスカルは言つた。眞の藝術は、藝術を氣にするものではない。カリエールを再び例にとつていうならば、展覧會に出るほどとすべての絵画は、絵画たるよりほかの何物でもないのに、かれのはそれらの間にあつて、これこそは人生に向かつて開かれた窓だと思われたものである。

正しき批評は受けいれなければならぬ。どれが正しき批評であるかを、諸君は容易に知ることができ。諸君自身が製作に当たつて襲われた諸疑問を、諸君に向かつて確かに指摘してくれるものこそ即ちそれである。諸君の良心が心服せぬ批評のごときに對しては、心を勞するに及ばぬことである。正しからざる批評などは、決して恐れなくていいのである。それらは、諸君を理解してゐる友人たちをば憤慨せしめるであらう。それらは、かれらをしてなおいっそう、諸君に對するかれらの同情について反省せしめる縁となるであらう。そうしてそれらの批評の動機を察知することによ／＼、深ければ、それだけいよ／＼強く、諸君の友人たちは諸君に對する同情を宣言するであらう。

諸君の才能がきわめて新しき種類に属する場合には、諸君はさしあたり味方を得ることは少なく、敵をつくることむしろかなり多かるべきを覚悟しなければならぬ。勇氣を沮喪してはならない。味方が勝つに決まつてゐる。なぜならば、味方は諸君を何故に愛するかを知つてゐる。敵方は、何故に諸君がかれらにきらわるべきかの理由を知つてゐない。前者は眞理に對する情熱に燃え、あらたな味方をつくることに絶えずつとめるであらうのに反し、後者はあのれらの誤れる偏見に對し、長続きするなんらの情熱をも示しえない。前者は執拗であるに、後者はひよりみである。眞理の勝利は確

実である。

社交界や政治界のこともにも關係をして時間を空費してはならぬ。諸君は、僚友の多くの人たちが策略によりて名譽を得、財産を得るのを目撃するであらう。かれらは眞の藝術家ではない。その代わり、かれらのある者は実に伶俐である。諸君にして、もしかれらの壇場においてかれらと覇を争わんとするならば、諸君はまたかれらと同じだけの時間を——換言すれば諸君の全生涯を——そのために奪い去られなければならない。そうすれば、諸君には藝術家である一秒間の時間も残らぬであらう。諸君は、藝術家としての諸君の天職を熱愛せよ。諸君の天職よりもより美しきものはない。それは、常人の思惟しているよりもはるかに高きものである。

藝術家は、人類に偉大なる模範を與える。

かれは、おのれの職業を愛好している。かれにとりてこの上もなき報酬は、仕事がよくできるといふ喜びである。悲しむべきことには、現代においては、人々は労働者に向かつて労働をきらうことを教えて怠業することを勧めている。世界は、しかし、すべての人々が藝術家の心を持つにいたらぬ限りは、——換言すれば、すべての人々がおのれの仕事を樂しむにいたらぬ限りは、——決して幸福にはならぬであらう。

藝術は、しかのみならずまた、実に一大誠実訓である。

まことの藝術家は、いつも自己の考える通りを、誤れる世論の騒ぎ立つ反抗をさえ侵して、正直に

言い表わす人である。かくして、かれは人々に正直を教える。

絶對的な誠実が、もし人類の間に支配するにいたつたとするならば、どれほどの進歩がたちまちにして實現されることであらう。

今まで社会にいれられていた、どれほどの誤謬と醜惡とが除き去られるであらう。そうして、どれほどすみやかにわれ／＼のこの地上が一箇の樂園となることであらう。

(深田康算全集)

五 言語の本質

安藤正次

言語は、われ／＼人類の思想の、音声によって言い表わされたものであつて、われ／＼人類は思想交通の主要な手段として言語を使っている。言語と思想との關係は、言語学上の重要な諸種の問題を含んでいるものであるが、簡単にその一面を説明すれば通常われ／＼の言語と呼んでいるものは、われわれの心のうちに起る思考の作用の結果として生じた思想の、音声によって言い表わされたものであるから、言語は思想の音声的記号といつてもよいのである。記号であるが故に、言語は完全に思想を表現しうるものではない。即ち、言語は必ずしも精密に思想の内容を言い表わしうるものではない。こういう意味からいへば、言語は、思想の形式化されたものであるともいえる。されば、音声的記号と思想との結合は、關係的、選択的のものであつて、それは全く社会の約束に基づくのである。例えば「山」という概念は、必ずしも「やま」ということばで言い表わさなければならぬとい

うことはない。他の音声の結びつきで言い表わしてもよいのである。しかし、わが國民の間では、「山」の概念と「やま」との連想の習慣が久しい以前から成り立っていて、それが固定的のものとなつてゐるから、われ／＼は「やま」をもって「山」という概念を言い表わしてゐるのである。「花が風で散る」というような言語の形式、くわしくいえば、主語を先にし述語を最後に置く排列の順序、「が」「で」という助詞で文法上の關係を示すという方法のごときもまた、われ／＼日本人が、こういう形式を發達せしめて來てゐるから、これが正しい思想表現の形式として認められてゐるにすぎない。必ずしもこういう形式でなければ、この思想が言い表わされないというわけではない。最初からの習慣が異なつていけば、別種の形式が正しいものとして認められるわけである。言語がこういうふうな社会的なもの、約束的のものであるということは、言語の觀察上、第一に注意されなければならない点である。學術の進歩しない時代においては、すぐれた學者でも、やゝもすればこの点を思い誤つて、自國の言語のみが最もよく思想を表現しうるものであり、最もよく考へ方の順序になかうものであるというような僻見に陥つたのである。わが江戸時代の國學者の言語上の所説には、往々にしてこの類のものが見えてゐる。

言語が社会的、約束的のものであることは、あるいは民族により、あるいは國民により、あるいは地方によつて、言語にそれ／＼の相違があるという簡單な事實によつても考へえられるのである。現在世界に行われてゐる多種多様の言語が、いかにして發達分岐して來たかという大きな問題はしばらくおき、今日、最もその研究の進んでゐるインド・ゲルマン語族についてみるに、東はインドから、西は米英にいたる廣い範圍に分布してゐる。この語族に屬する諸語が、元來、同一祖語から分

かれ出たものであることは、なんら異説がないのである。しかし、専門學者以外の人にとつては、インドの古代の梵語と英語とが、同系の語であるというようなことは、ほとんど考へえられないことである。今日の英語とドイツ語とが、ともにインド・ゲルマン語の一派であるゲルマン語に屬するものであるということも、おそらくは意外に思ふ人が多からう。ハンガリーやトルコやフィンランドの言語が、インド・ゲルマン語以外のもので、シベリア地方のことばや、滿洲語、朝鮮語などとともに、ウラル・アルタイ語族に屬するものであるということを知つて驚く人もあらう。インド・ゲルマン語族に屬する諸語が、今日われ／＼が知りうるような分派を形成し、各國語に分裂するようになったのは、祖語から分かれ出た時代のあい異なるものにもよるのであるが、また、それ／＼の言語の發達した地域の異なるにもよるのである。原始アリアン民族の發祥地が、旧説のごとく、中央アジアのある地方であるか、コーカサス地方であるか、あるいはまたある學者の説のごとく、スカンジナビア地方であるかは別問題として、とにかく、まだアリアン民族のあい分かれな時代における原住地の言語は、ほぼ同一であつたということは考へられる。從來、インド・ゲルマン語學者の考定してゐるインド・ゲルマンの原始語というものは、仮説的のものであり、インド・ゲルマン語族の祖語がいかなるものであつたかということ、一々の語について知ることが困難であるにしても、今日あい分かれてゐる言語の系統をたずねて、それが同一の根源から出ていることが、學術上十分に証明され、それらの言語を用いてゐる民族が、同一民族に屬するものであつて、その發祥地を同じくしてゐることが疑われない以上、今日、インド・ゲルマン語を語つてゐる民族の祖先は、遠い昔において同一の言語を持つてゐたものであるということ、否定されないものである。その同一のことばを持つてゐた民

族が、長い世代の間に、甲の一派は南下し、乙の一派は東漸し、丙の一派は西遷するというようなあい分かれ、それ／＼ある一定の占拠地において、別々の團体的生活を営むようになった。そうすると、おのずからそこに別個の社会的意識が発達する。異なつた環境の影響をうけて、風俗習慣も違つて来る。生活の様式も、思想感情も変わつて来る。しかも、太古においては、相互の交通関係がきわめて疎遠であるから、各分派間の連絡が十分でなく、したがって、それ／＼あい異なる文化を享有するにいたるのは自然の理である。こゝにおいて、文化の反映である言語の上にも多大の影響が現われて来て、語彙において、表現の様式において、それ／＼別種の発達をみるにいたるのは当然である。しかもまた、他の一面において、言語上における発音の変化が、更にその差異の程度を大ならしめる。

元來、発音というものは、同一個人の間においても、必ずしも常に精密に同一であるとはいへない。聴覚による発音の是正、発音運動の適確というようなことは、常に期待されうるものではない。われ／＼は、みづからことばを語り、または他人のことばを聞く場合に、一々の音を吟味して、これを言い分け、聞き分けるという態度をとるものではない。われ／＼はある音の集まりを一つのことばとして発音し、またこれを受け取るのであつて、通常の談話の際には、一々の音の少しぐらゐの発音の相違などは、常に聞き過ごしてしまうのである。ことにまた、音は單獨に発音されることはほとんどまれであつて、通常、他の音と結びついて現われるものであるから、その場合や、前後の音の関係によつて変化を受けることが多い。こういう発音の変化は、その程度が著しい時には、言語の理解が妨げられるから、おのずから抑制されてはなほだしきまでにはいたらないけれども、それは、ある範

囲、ある時代の間だけのことである。長い年代を経過するうちには、最初はきわめて微細な変化で、ほとんど人の注意をひかないくらいであつたものでも、漸次変化を重ねて行くにしたがつて、その時代時代の人々はむろんそれほどの変化を感じないのではあるが、後世から見れば、著しい変化がその間に認められるようになる。こういう音韻の変化は、必ずしも発音の不正確とか、誤謬とかいうような原因からばかりではない。類推によるものとか、同化によるものとか、種々の他の原因からも来るものであるが、要するにそれらの変化は、自然的に推移して、暗黙のうちに社会の認容を得たものであるといえる。しかしてまた、こういう変化は、必ずしも、常に同一の場合に、同一傾向をとつて現われるものではない。甲の社会において、ある語が、ある年代の間にAという方向に変わつて来たとしても、その同じ語が、同一年代の間に、乙の社会において、同じくAという方向に変わるとは限らない。変わらずにすむこともあれば、別にBという方向に変わるといふこともある。それはすべて、その語を用いている社会の人々の暗黙の認容いかによつて決せられるのである。言語の音韻、即ち外形の変化がそうであるばかりでなく、言語の意義、即ち内容の変化も、やはり同様である。こういう関係であるから、同一祖語から分かれた言語であつても、同時に分かれたもの、異時に分かれたもののいずれたるを問はず、それが別々の社会において用いられ、ある年代を経過した後になると、おのの別様の発達を遂げるようになり、それ／＼の分派を成すにいたるのである。インド・ゲルマン語から、インド語・イラン語・ローマンズ語・ゲルマン語・ケルト語・スラヴ語などの各分派ができるにいたつたのも、またこういう次第からである。その分派の中に、また個々の國語があり、國語のうちに、また方言が分かれるというのも、同様の理法による。しかしながら、こういうふうな長い年代を

経て、きわめて広い地域に分布した言語が、それ／＼特殊の傾向をとって発達し、変遷して行つても、その各地方の言語は、やはり原始時代から持っている本質は失わないのである。インド・ゲルマン語族の例でいえば、その語族に属する言語は、一見したところでは非常に異なるように思われるけれども、いずれも、インド・ゲルマン語の特質を共通に持っている。いな、そういう共通の特質があればこそ、学者はその個々の言語を一語族にまとめて、インド・ゲルマン語族というものを認めるのである。

言語は、社会的、約束的のものであるから、個人の力が、直接に一般の言語に影響を及ぼすことはほとんどないのである。言語の個人差というものは、單にその個人の言語に現われるのみにとまってしまう。いかなる政治家が、その権力をふるって言語を改めようとしても、いかなる学者がその見識をもって言語を変えようとしても、社会一般が、これを承認しなければ、なんらの効果をもあげることができない。すぐれた文学者の努力が、國語の上に影響を與えるというような例はある。しかしそれは、その文学者の作品が、國民多数の尊崇を得、憧憬^{とうけい}の的となつていような場合であつて、やはり、それも社会が動いた結果なのである。法令や理論は、言語の慣用を動かす力を持っていない。言語は、たゞ國民一致の内的要求によつてのみ支配される。この意味からいつても、言語の上には、その時代の社会相が現われる。各時代の言語によつて、文化の種々の姿がうかゞわれる。例えば、漢文学の盛んな時代には、語彙の上にも、表現の様式の上にも、その影響が著しいし、佛教の勢力の強かつた時代の國語は、佛教的色彩を帯びているし、西洋文学の憧憬^{とうけい}される時代には、國語の上にもヨーロッパ語の感化が認められるがごとく、いずれも、その時代相を語るものといふべきである。しか

し、強い時代の力も、なおその國語の本質的方面には、力を及ぼすことができないのである。民族には、それ／＼固有の民族性があり、國民には、それ／＼固有の國民性があつて、それが、どこまでも民族なり國民なりの性情の根底となつていのがごとく、語族なり國語なりにもまたそれ／＼の特性があつて、その特性はどこまでも失われないのである。

いずれの國語においても、漸次古代から近代に及ぶにしたがつて、言語の組織が簡單から複雑に進んでいるのが一般的の現象である。社会が発達し、文化が発展するに伴つて、これに適應するように語彙が増加して来る。思想が複雑になり、觀察が緻密^{ちみつ}になつて来れば、これを言い表わす表現の様式も、變つて来なければならぬ。これは当然の理である。もつとも、國語によつては、古代においては、語法上の關係を示す語尾變化などの複雑であつたものが、後世に及んで、簡單になつたものもある。しかし、それは單に語尾變化だけが簡單になつたのであつて、それに代わるべきものが発達していることを考えれば、全体から見ても、複雑から簡單に進んだとはいえない。また、古代においては総合的の性質を多く持つていたことが、後世になつて分析的の傾向を著しく持つようになつたといふような國語もある。これも、分析的の表現の方が、複雑であると見る方がむしろ當を得ている。インド・ゲルマン語族に属する諸語についていえば、梵語やギリシア語のごとき、時代の古い言語ほど、名詞の語尾變化や、動詞の活用などが複雑であり、また同じく英語・ドイツ語などについてみれば、古い時代の英語やドイツ語の名詞の語尾變化や、動詞の活用の形式は豊富である。今日の英語では、そういう形式はきわめて簡單になつていゝ。しかし、これによつて、今日のインド・ゲルマン語が、昔の時代のものよりも、言語の表現の様式が簡單になつていゝといふことはできない。また、古代ラテ

ン語のごときは、きわめて総合的の性質が著しいものであつて、他の國語では、代名詞・助動詞・前置詞で言い表わされ、もしくは語詞の位置などによって示されるべき語法上の關係が、全く語尾の變化だけで示されることになっている。したがつて、語詞の排列の順序は、いかようであつても、語尾の變化で、語詞相互の語法上の關係は明らかにわかる。しかるに、近代の英語は、インド・ゲルマン語中の最も分析的な國語であつて、語法上の關係を示すには、前置詞や助動詞を用いたり、語詞排列の順序によつたりしなければならぬことが多い。しかし、その古代にさかのぼってみれば、英語もやはり他のインド・ゲルマン語の古い時代のもののように、相應に総合的の傾向を持っていたのである。以上論じて來たように、言語は時代と方處を異にするにしたがつて、種々の變遷や相違ができて來るが、どこまでもその固有の本質は失われなないというのは、ひつきよう、どういふ理由に基づくものであるかを考察してみたい。

一体、われ／＼が、自分の生まれた國のことばを自由に用いるようになるのは、どういふ順序によるかというに、これは、兒童が言語を習得するにいたるすじ道を考えれば容易に理解しえられる。兒童は、最初は、單に周囲にある人々の言語を聞いて、これを模倣するにとゞまるのであるが、漸次、自分の意思に基づいて言語を用いることができるようになる。生まれ落ちてから、しばらくの間は、ある種の音を発音しうるにすぎないが、漸次、種々の音を発音しうるようになる。しかし、そういう時期を過ぎて、周囲の人々の言語を模倣しうるにいたるまでには、かなりの時日を要する。周囲の人の言語の模倣ができるようになって、その模倣は、最初の間はきわめて不完全なものである。模倣も不完全であれば、そのことばと、ことばによつて示される内容との連想も不十分である。その連

想が十分にできあがるまでには、かなりの年月がかかる。しかし、そのうちには、あることばを開けばその意味がわかるようになり、次いで、意識的に、みずからことばを用いることができる時期が來る。最初はかたことを言ひうるにすぎないが、漸次完全な言語を発音することができるようになる。こうして、兒童は、次第に、自分の語彙を豊富ならしめ、複雑な表現の形式を覚えこんで行くのである。かくのごとき言語習得の時期において、兒童の言語の師となり、模範となるものは、實に周囲の人々の言語である。日本人が日本語を語り、中國人が中國語を語るのとは、日本人なり中國人なりが、生まれ落ちてから成長するにいたるまで、常に中國語を語る人々、日本語を語る人々の間に育てられるからである。學術の開けない時代には、日本人が日本語を語り、中國人が中國語を語るのとは、先天的のものである、遺傳的のものであるというように解されていたが、この考えの誤っていることは、日本人の兒童でも、幼時から英語を語る人々の間にばかりあれば、日本語を全く知らずに育つという簡単な事實で証明される。即ち、人類の言語をあやつる能力は、人類が先天的、遺傳的に持っているところのものであるが、各個人が、それ／＼の國語を語りうるにいたるのは、全く生まれ落ちてから後の習得によるものである。

われ／＼が、國語を習得するにいたるのは、だいたい右のような次第であるが、生まれ落ちてから常に國語の間にはぐくまれ、國語によつて考えることを教えられ、國語によつて思想を發表することを教えられているわれ／＼の、國語によつて與えられる影響は、實に多大である。國語の感化の力、國語の訓練の力は、實に強い。この國語の力こそ、常によく國語の固有の性質を失わざらしめているのである。

(古代國語の研究)

國語學習の手引

次に掲げたものは、各課の教材を学習するに当たり、どんなことをしたらいいかを、幾つか拾いあげて書き示したものである。

各課の文章を読むための準備もあり、その心構えもある。またその方法となるようなもの、理解を助ける問題、理解をためす質問、更に理解を発表する話し合いもある。

なお、表現力を伸ばすための仕事も織りこまれており、研究調査のしかたを示してもある。

しかしこれらは、みな必ず完成しなければならないものではなく、適当に取捨選択をしたり、あるいは補充したりして、興味のある正しい学習を進展させて行ってほしい。

國語学習の手引

一 案内者

(1) この随筆について次のことを読みとる。

イ 案内記に対する二つの態度。(アカデミックなオーソドックスなやり方、危険の多いヘテロドックスのやり方。)

ロ 作者のいう「案内者」の意義。

(2) 次の作者の敘述について話し合う。

イ 自分の「お山」以外のものはみなつまらなく見える。(七ページ)

ロ 考えてみると案内者になるのも被案内者になるのもなか／＼容易ではない。(一一〇ページ)

ハ そうなるともう私がこゝに言っているたゞの「案内者」ではなくって、それは「師」となり「友」となる。師や友に導かれて誤って廣野の道に迷ってもうらみはないはずではあるまいか。(一一ページ)

(3) 「よい案内者」という題で文を書く。

(4) ニュートン・ラプラス・アインシュタイン・グラム・ヘルムホルツのうちからひとりを選んで傳記を調べる。

(5) 寺田寅彦の他の随筆を読んでみる。

(6) ベデカというのは、カール・ベデカ (Karl Bedeker, 1801-1856) によって出版された案内書の通称である。カール・ベデカはドイツのエッセンの人、一八二八年ライン川案内の小冊子を刊行したが、これがもととなって欧州諸國の案内書ができた。カールの仕事は、その子フリッツ・ベデカ (Fritz Bedeker, 1844-1925) の手によって引きつがれ、一流学者の協力を得て、最も信頼される案内書となったのである。

二 ガラス障子

- (1) 子規の和歌について次のことを考えてみる。
- イ ガラス障子の歌四首にあらわれている作者の生活について。
- ロ 「庭前即景」十首に共通している作者の作歌の態度について。
- ハ 「ふぢの花」の歌六首のうちに、ことばがきにある「歌心」がどう展開しているか。
- ニ 「やまぶき」三首、「紅梅」三首、「つくし」三首のうちに、それ／＼共通している点について。
- (2) 俳句三十句を、春・夏・秋・冬の季に分類し、それ／＼の季のうち最もよいと思ったものを、めい／＼一句ずつあげて話し合う。
- (3) 俳句三十句のうちによまれている動物や植物を抜き出し、どういう動植物に作者が俳味を感じているかを調べる。
- (4) 「九月十四日」(明治三十五年)の日記のような生活が、和歌や俳句にどういうふうにあらわれているかを話し合う。

- (5) 子規の俳句と和歌の革新の仕事について調べる。
- (6) 次のところの理解を確かめる。

イ 金華の露一ぱいという心持(一六ページ)——「金華の露一ぱい」の句は、唐の詩人李商隱の「漢宮詞」という七言絶句の詩「青雀西飛竟不回。君王長在集靈台。侍臣最有相如渴。不賜金華露一杯。」によっている。

ロ 昨夜もおくぜい来ておった友人(碧梧桐・鼠骨・左千夫・秀眞・節)(一六ページ)——河東碧梧桐・塞川鼠骨・伊藤左千夫・香取秀眞・長塚節であって、子規没後、子規の文学についての精神を伝え、発展させた人々である。

- (7) めい／＼の作った和歌や俳句を発表する。

三 うつりゆく心

- (1) 本文について次のことを読みとる。
- イ それ／＼の日記にあらわれている作者の生活。
- ロ おり／＼の作者の感想。
- (2) 作者の次の感想や意見について話し合う。
- イ 心はいたづらに雲居にまでのぼりて、思ふことはきよくいさぎよく、人はおそろらん死といふことをも、たゞ風の前のちりとあきらめて、山ざくらちるをことわりと思へば、あらしもさまでおそろしからず。(明治二十七年三月の記)(一九ページ)

ロ わが身きよしといへども、感は人の心にありて耳にあらねば、かひなきは放言高論のたぐひなり。(同上) (二〇ページ)

ハ つとめは行ひなり。行ひは徳なり。徳つもりて、はじめて人の感おこる。(同上) (二〇ページ)

ニ 「世はいよ／＼あなどるまじかりけれ。」「あなどるまじきは世の中なり。」(二十八年二月の記) (二一ページ)

ホ あさまじきは、そのそこにひそめるところのさま／＼なりけり。(二十八年十月の記) (二一ページ)

(3) 次の人々について調べる。

イ 星野子

ロ さがのや

ハ 山田の美妙

(4) 樋口一葉の作品(小説・随筆等)を読み、その読後感を発表する。

(5) 樋口一葉について調べ、その作風を話し合う。

(6) 樋口一葉以後の女流作家について調べる。

四 ロダンの遺言

この課はポール・グセル (Paul Gsell) が、ロダン (Rodin) の藝術論を集録した「藝術」

(Paris) (一九一九年版) の巻頭に載せられたロダンの「遺言」(Testament) の翻訳であって、近代彫刻の巨匠と仰がれたロダンの体験からにじみでていることはである。

(1) ロダンは「藝術家」として望ましい態度をどう説いているか。次の二つを中心にして、おのの章からまとめてみる。

イ 藝術家の技術に関するロダンの教え。

ロ 人間としての生き方に関するロダンの教え。

(2) この課の中で特に心うたれた章をあげて、それについて感想を語る。

(3) 左のことばについて知りえたことを話し合う。

イ 傳統

ロ 自然

ハ 形態

ニ 厚み

(4) 近代彫刻史上におけるロダンの位置を調べる。

(5) この課に出ている彫刻家や画家(フィディアス・ミケランジェロ・ラファエル・ユーージェーヌ・カリエールなど)について、その傳記や業績を調べる。

五 言語の本質

(1) 各段落ごとの理路をたどって、十分に理解して読み、各段落ごとの大意をまとめてみる。

- (2) 作者の次の意見について話し合う。
イ 記号であるが故に、言語は完全に思想を表現しうるものではない。(二九ページ)
ロ 言語は、たゞ國民一致の内的要求によってのみ支配される。(三四ページ)
ハ 言語は時代と方處を異にするにしたがつて、種々の変遷や相違ができて来るが、どこまでもその固有の本質は失われない。(三六ページ)
ニ 言語習得の時期において、兒童の言語の師となり、模範となるものは、実に周囲の人々の言語である。(三七ページ)
- (3) インド・ゲルマン語族・ウラル・アルタイ語族について知りえたことをまとめてみる。
- (4) 次のことを調べて説明のできるようにする。
イ 言語は思想の音聲的記号といってもよいのである。(二九ページ)
ロ 言語は社会的、約束的のものである。(三〇ページ)
ハ 人類の言語をあらゆる能力は、人類が先天的、遺傳的に持っているところのものである。(三七ページ)
- (5) 「言語」または「國語の力」という題で文を書く。

六 光榮の作曲家

- (1) この課はフランスの映画監督ジュリアン・デュヴィヴィエ (Julien Duvivier) のアメリカにおける作品「運命の饗宴」(一九四二年映画化、原名マン・ハットン物語 Tales of Manhattan)

のシナリオであって、原作と脚色はベン・ヘクト (Ben Hecht) ほか九名の合作になるものである。(この課の終りにジュリアン・デュヴィヴィエ作とあるのは、監督の意味であって、シナリオの原作者の意味ではない。)

物語は一着の燕尾服を中心として、六つの話より成り立っており、この課の部分はその第三の話である。映画における六つの話を統一している燕尾服が、こゝではどういふふうに使われているかを見て読んでいこう。

- (2) 次の表はこの課の第一の場面をまとめたものであるが、この例にならって、この課の全部を表にまとめてみる。

場面	場 所	登場人物	物 語 の 発 展
1	ニューヨークの 場末の安カフェ の内部	チャールズ・ スミス ウォーカー	1. 生活のために安カフェのピアノひきとなっ ているスミス、光榮の日を夢みている。 2. ショパンをひくスミスにこゝとをいう主人。 3. 外出しようとするスミス。

- (3) この話のクライマックス(やま)はどこにあるか考える。
- (4) 次の人々のせりふに使われている「音楽」ということばについて話し合う。
イ 「このやろう、おれがなんだっておまえに給料を拂ってと思う。音楽のためだぞ……そんなちんぷんかんぷんのためじゃない。いい音楽だ、わかったか。」(三八ページ)

- 「音符はたゞ音符じゃない。それは頭で書かれ、心で書かれた音符だ。感情のない音楽は雑音だ……わからんかね。」(四〇ページ)
- (5) デュヴィヴィエについて調べる。

七 うさぎ

- (1) この課について次のことを読みとる。
- イ うさぎに対する作者の感情の変化。
- 作者の文体の特徴。
- (2) うさぎに対する観察のするどさがあらわれていると思われるところを書きぬく。
- (3) うさぎに対する感情の変化をたどって、次の間に答える。
- イ 「飼っておもしろい動物と思わなかった」とあるが、どういう点からそう感じたのであるか。
- ロ うさぎを飼う前の、父と娘との会話には、どういう感情があらわれているか。
- ハ 「今まで三度飼ったうちで、今度のやつが一番おもしろい」とあるが、どういう点でそう感じたのであろうか。
- ニ 「うさぎが台の上にいるのを食堂から、ガラス越しにながめているのは近ごろ楽しみの一つだ」とあるが、どういう点からそう感じたのであろうか。
- ホ 「しかし自家のうさぎはもう殺せない」とあるが、なぜか。

八 春が来た

- (4) 作者志賀直哉について調べ、その作風を話し合う。
- (1) 作者が分けている四節の大意をまとめてみる。
- (2) 次のことについて知りえたことを話し合う。
- イ 利己心と自愛心
- ロ 全と個との関係
- ハ 現在に生きる
- ニ 歴史の春
- (3) 次の文を読んで、それ／＼の問について考える。
- イ 單に未來にのみ期待するならば、われ／＼の生涯は、用意された食卓のそばに、空腹のまゝ永久に立たねばならぬのにも比せられるであろう。現在⁽¹⁾は未來への單なる手段ではなくして、⁽²⁾独自の意味を持たねばならぬ。(五七ページ)
- (1) どういうたとえか。
- (2) どういう意味を持てばよいのか。
- 現実⁽¹⁾は、かつてこの理念を具体化したことがない。それどころではなく、⁽²⁾多くの有徳者は徳の故に、人生の苦難を味わわねばならなかった。(五九ページ)
- (1) どういう理念か。

(2) 実例をあげてみる。

ハ 自然の四時は一年にして循環する、けれども、⁽¹⁾歴史の四時は永遠的だといえるであろう。現実の底に思いをひそめるならば、現在を深く把握するならば、われ／＼は勇氣を見出たことができる。歴史は動きつゝある。⁽²⁾生まれるためには、ひとたび死なねばならない。腐った種子において、再びもえ出でる力を認識する者にして、⁽³⁾はじめて人生を知り、歴史を理會する者と見える。(六〇ページ)

(1) どういう意味か。
(2) なぜか。

(3) 眞の人生を知り、歴史を理會するとは、どういうことか。
(4) 次のところの表現を確かめる。

イ 私は改めて、「わが家の富」を認識したのである。(五五ページ)——「わが家の富」は徳富蘆花(一八六八—一九二七)の作品「自然と人生」(明治三十三年刊)の中で、自宅の狭い庭の四季の移りかわりに感じられる自然の美しさを述べた文の題である。

(5) 次の題で文を作る
イ 全と個
ロ 幸福

昭和二十二年十月二十一日 印刷
昭和二十二年十月二十五日 印刷
昭和二十四年六月一日 修正三版印刷
昭和二十四年六月五日 修正三版印刷
〔昭和二十四年六月一日文部省検査済〕

高等國語 一下
昭和二十四年度用
定 價 金十四圓六十錢
(重訂高税込)

著作權所有

著者兼
発行者

文 部 省

刻
行者

東京都千代田区神田岩本町一番地
教育圖書株式會社
代表者 小松謙助

印刷者

東京都新宿区市谷加賀町一丁目十二番地
大日本印刷株式會社
代表者 佐久間長吉郎

Approved by Ministry
of Education
(Date Jun. 1, 1949)

發行所 教育圖書株式會社



